

秀吉に仕える

一五八三(天正一一)年、賤ヶ岳の戦いで、清秀が戦死すると、後継の秀政の後見役となった。秀政の正室は、美濃細目郷(現八百津町)の古田氏の娘であった。この頃から、秀吉主催の茶会に、秀政を伴いしばしば参席している。同一二年、秀吉の差配で、織部正に任官し、一時景安と名乗ったが、同一六年からは重然を名乗る。

以後、へりくだって織部助と書いたりするが、正式には織部正重然と書く。天正一八年の小田原合戦に、従軍したとき、七月利休の慰問を受け、八月共に熱海入湯をしている。

一五九四(文禄三)年伏見城が竣工すると、城下に上屋敷、木幡に下屋敷を設け、秀吉のお伽役(ブレーション)として働いている。朝鮮侵攻の基地肥前名護屋城下には、奇留屋敷を築造し、自らは、秀吉の身近に仕えお伽役を務めた。一五九八(慶長三)年秀吉が死去すると、父重安が殉死、その遺領二〇〇〇石を継いで、自らは隠居する。

家康に仕える

一六〇〇(慶長五)年、関ヶ原の戦いに先だって、家康は、隠居の身の古田織部に、茶友の常陸四万石の領主佐竹義宣を家康方に味方するように、誘降使者役を命じた。義宣は、三成のお陰で大領主となった恩義を深くもっていて、既に三成方から味方要請がきていた。説得結果は、「両軍に味方せず、不戦を貫く」であった。この不戦態度を貫く選択は、難しいことであつたが、織部も自らの後継者重嗣にも不戦態度を取らせるということとで、説得を続け、ついに了承を得た。戦後、佐竹家は秋田へ領地を半減されて移封されたが、藩は幕末まで継承できた。古田家の五万石は維持され、織部は七〇〇〇石加増され、合わせて二万石となり、大名に列することとなった。

一六〇五(慶長一〇)年、京都四条の織部邸で開催された茶会に、將軍秀忠が出席した。以後、織部は徳川將軍家の茶道指南役となり、家康・秀忠の茶道及び政道のブレーション役を担うことになった。



黒織部沓茶碗 古田織部展示館提供



黒部皿(大平窯) 古田織部展示館提供



黒部茶入 古田織部展示館提供

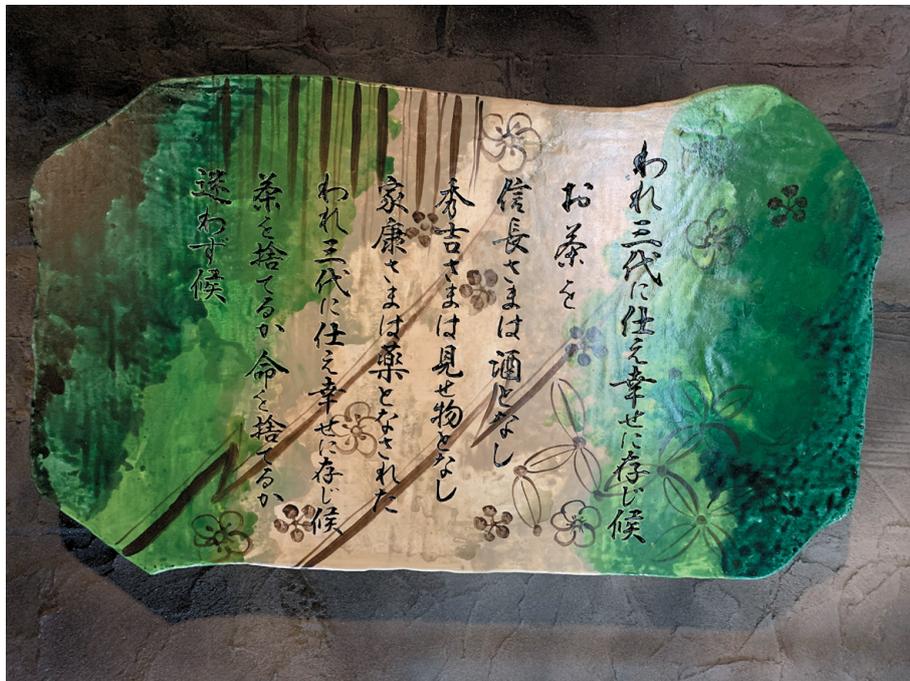


鳴海織部茶碗 古田織部展示館提供

織部は家康から賜死

一六一四（慶長一九）年、大坂冬の陣で怪我をした織部は、家康から薬が届けられた。そうした関係でありながら、翌一六一五年六月、大坂夏の陣直後、織部は、家康から切腹を命じられ、死んだ。

その理由としては、一六二二（慶長一七）年、江戸の將軍家へ赴く途中、駿府の家康と会談した際、豊臣秀頼滅亡如何を問われて、滅ぼす必要はない旨の返答をしたことであろう、と見られている。織部の茶の湯の精神は、共存・共生を貫くことであった。家康は、後顧の憂いのないように滅ぼすことに賛成してほしかったのに、期待に反した。織部は、当時、仙台の城主伊達正宗をはじめ、多くの大名たちからも、茶道指南を要請されており、その影響力は大きく、危険視されたのであろう。



古田織部展示館提供

織部の生き方とその後

織部の生き方には、次のような特長がある。

①文化は政治から分離独立の世界である。

天正一九年二月、秀吉に追放されて堺へ下る師利休を、淀川の畔で、細川忠興と見送る。慶長一九年八月、秀頼寄進の鐘銘を案文した清韓せいかん禅師を、幕府は江戸へ呼び寄せ糾弾きうたんした。帰京した清韓を茶会に招くなどした。

②茶会に瀬戸物を使用する。

舶来品珍重時代、故郷美濃で使った瀬戸物(美濃焼)で良いとした。

③茶会の「ひょうげもの(沓形)」茶碗使う。

一五九九(慶長四)年二月の伏見の織部邸での茶会で初めて、ゆがんだ茶碗を使用、人々を驚かすが、流行する。即ち、世の中は円型食器ばかりではない、左右不対照のものこそ一般、という考え方。さらに、茶碗 食器に彩色しデザインをした茶碗・食器を使い、流行の基となった。

④割れ茶碗・水指を繕い使う。

晩年の慶長一〇年頃から、一見できそこないに見える水指を漏りないように繕い使用。また、傷のない茶碗を四つに割って繕い使用。これは、出来損ないのものでも、傷物でもつくろえば機能する、という考え方で、障害者・健常者、権勢の強い者・弱い者共に共生という思想。それ故に、賜死となった、と言えよう。

報道にみる 古田織部

織部に関する記事は、一九九三(平成五)年一月一日の岐阜新聞「なぞの古田織部」記事などが実施された平成三年頃から多く出るようになった。平成六年には、織部サミットが、本巣町で開催され、やがて、同一五年に、岐阜県は、ニューヨークのメトロポリタン美術館で織部スタイル展と大茶会の実施、織部大賞の設定などを行うようになった。新聞をにぎわせた。丸山は、平成六年には、「なぜ今織部か」をテーマに連載記事を出した。

古田織部の全容、早分かり

写真や図 新たな歴史的発見も

本巣町が冊子発刊



織部の出身地が本巣郡本巣町山口であること、その領地、不破郡の代官をしていたこと、大徳寺に拝塔があることなど、新たな歴史的な発見を含めて、織部の生涯を明らかにしている。丸山館長は、「郡上郡下田(美並村)古田毅典家に伝来する古田系譜」「豊後(大分県竹田市)古田重統(大分県竹田市)古田重統家古田系譜」や史書から、古田重然(しげよし)が織部であり、大野郡中野(現揖斐郡大野町中之元)城主古田勝信がルーツという。織部は、佐介、景安ともいい、古田織部助とも名乗っていた。織田信長に従軍、山口城主。美濃以外に山城・摂津(京都府)などに領地を持っていた。今回、西岡万吉領(同府桂川右岸一帯)も領地だったことが分かったともいう。丹波(同府)、大和国(奈良県大和市)などを加えると、所領一万石のうち五四%の領地が判明したが、そのほかは文書でも分からない。

武将・茶人として著名な古田織部(一五四四―一六一五年)生誕四百五十年祭が五、六の両日、出身地の本巣郡本巣町で開かれるのを前に、「古田織部の全容をまとめた同祭記念冊子「古田織部 安土・桃山の茶匠」(B5判、百四十三頁、丸山幸太郎歴史資料館長著、本巣町刊)が発刊された。写真や図をふんだんに使って古文書や調査から、

織部の出身地が本巣郡本巣町山口であること、その領地、不破郡の代官をしていたこと、大徳寺に拝塔があることなど、新たな歴史的な発見を含めて、織部の生涯を明らかにしている。丸山館長は、「郡上郡下田(美並村)古田毅典家に伝来する古田系譜」「豊後(大分県竹田市)古田重統(大分県竹田市)古田重統家古田系譜」や史書から、古田重然(しげよし)が織部であり、大野郡中野(現揖斐郡大野町中之元)城主古田勝信がルーツという。織部は、佐介、景安ともいい、古田織部助とも名乗っていた。織田信長に従軍、山口城主。美濃以外に山城・摂津(京都府)などに領地を持っていた。今回、西岡万吉領(同府桂川右岸一帯)も領地だった

冊子「古田織部」と著者丸山幸太郎歴史資料館長 岐阜新聞本社

織部焼の振興にも努めた。さらに、菩提寺は京都興聖寺にあるが、法名金甫宗屋と記されている大徳寺三玄院境内に拝塔(供養塔)があることが初めて判明したとしている。ほかに織部が発行した十九の文書目録、年譜、門人・茶友録などがつけられて、この冊子で織部のすべてが分かる仕組みになっている。今後、織部研究者らの中で話題になりそうだ。